

CR（絶滅危惧ⅠA類）

スズメ目 モズ科

チゴモズ

Lanius tigrinus Drapiez, 1828

英名：Thick-billed shrike

カテゴリー判定基準：A-2

旧レッドリストカテゴリー		
1991	1998	2007
—	VU	CR

中国南部やスマトラ、フィリピンで越冬し、日本には夏鳥として渡来する。モズやアカモズよりも樹林地を好み生息し、主として昆虫を採餌する。本州中部から東北地方にかけて局所的に分布するが、元来生息数は少なかったと推測される。都市化によって生息域を失った例があるものの、かつて生息していた地域の大部分での減少、消失要因は不明である。現在ではほとんど生息を確認できず、国内での絶滅が危ぶまれる。

The Thick-billed shrike is a small migrant shrike that breeds in Japan, and winters in southern China, the Philippines, and Sumatra. Its suitable habitat is the forest edge, and it feeds on insects. It had been sparsely distributed from central to northern Honshu in Japan, but in recent decades it has disappeared from many of its past breeding grounds. Its habitat was lost due to urbanization in Tokyo, but the causes of its decline in other areas are unknown. It is possible that its populations have become extinct in Japan.

基礎情報

■**形態** 全長約18.5cm、嘴峰長15～16mm、翼長82～90mm、蹠長21～25mm、尾長69～80mm。他のモズ類に比べ嘴は相対的に太い。オスは額、目先、過眼線は黒く、前頭、頭頂、後頭、後頸は青灰色。背、肩羽、腰、上尾筒は赤褐色で、黒くて細い横斑がある。下面全体は白色、嘴は黒く、脚は灰黒色。メスはオスに似ているが、目先は汚白色、頭上の灰色は少し褐色を帯び、黒褐色の細かい横斑がある。国内に生息するモズ、アカモズともに頭頂部分が褐色、もしくは橙色であり、チゴモズは青灰色であることから判別できる。さらに肩、および背に明瞭な波状模様を持つモズ類はチゴモズ以外にない。

■**分布域** 日本には夏鳥として渡来し、中国南部、スマトラ、フィリピンで越冬する。

■**生息環境** 低地から低山の明るい広葉樹林や針広混交林にすみ、郊外の雑木林やゴルフ場の松林などでも繁殖する。一般習性はとくにモズと変わらないが、モズよりは樹木の多い所を好

む。高い枝に営巣することが多く、枯枝、樹皮、細い根、イネ科植物の茎などで、皿型の巣を作る。ロシア南ウスリー地方でも生息密度は低く、川沿いの広くないうっ閉した所や小川沿いにある密な灌木林と接する森林林縁部に生息する。

■**生活史** 繁殖期は5月から7月。ロシアと日本では6月が産卵期である。年1回繁殖、一夫一妻、縄張り性である。一腹産卵数は3～6卵で、ほとんどが5卵。卵は淡青緑色の地に、褐色、緑褐色、灰色の斑点のあるものと、淡赤褐色の地に、赤褐色、紫色の斑点があるものがある。抱卵期間は15～16日間、育雛期間は14日間、巣立った雛は14日間、親の縄張りにととどまる。アカモズとのつがい形成が確認され、雑種が生まれる。

現在の生息状況

■**分布域の現況** 本州中部から東北地方にかけて局地的に分布する。生息確認の多かった新潟県で生息確認地点が減少し、東京都など他の生息地でも減少傾向が強く、1978年に実施された第2回自然環境保全基礎調査で生息確認があった場所の大部分で1998年には記録できなくなっ

た。1997～2002年に繁殖が確認されたメッシュは2つ、可能性のあるものは1つであった。国内で絶滅する可能性がある。

■生息地の現況 1970年代に東京都や埼玉県で生息が確認されていた場所は、住宅地となり生息環境が消失した。減少を続けてきたため、生息適地などに関する情報がほとんど残っていない。本種に特化した確認調査を実施しなければ分布域の現況の把握は困難である。しかし、他の地域で生息が確認できなくなった場所での環境変化については分析がなく、不明である。

■個体数の現況 生息総個体数を推定できる資料はないが、1970年代においても分布が局所的であったことから個体数はもともと多くなかったと考えられる。渡り性のモズ類は一般に土地執着性が高いため、局所的に生息確認できなくなるとその場所に繁殖個体を復活させることは困難と思われる。

存続を脅かす要因

東京都では、生息地が住宅地となった（71）。全国的にはよくわかっていない。

保護対策の現状

とくになし。

特記事項

世界的にも最も情報が少ないモズ類の1種である。アカモズと同様に北陸地方の海岸林にも生息していた記録があり、東北地方の内陸部でも未確認であるが記録されている。東北、北陸地域の日本海側沿岸の情報が不足している。

参考文献

- 今西貞夫・茂田良光・吉野俊幸, 2006. 雄アカモズと雌チゴモズの種間つがいとその雑種. 山階鳥類学雑誌, 38: 90-96.
環境庁生物多様性センター, 1999. 生物多様性調査鳥類調査中間報告書. 生物多様性センター, 富士吉田. 342pp.
環境省自然環境局生物多様性センター, 2004. 第6回自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田. 343pp.
小池重人・小野島学, 1999. 新潟県における繁殖期の鳥類相の変化. 夏鳥の減少実態研究報告. 東京大学渡り鳥研究グループ, 東京. 110pp.
日本野鳥の会, 1980. 第2回自然環境保全基礎調査報告書(鳥類). 環境庁. 560pp.
日本野鳥の会, 1998. 鳥類繁殖状況調査. 東京都環境保全局, 東京. 108pp.
新潟県野生鳥獣生態研究会, 1982. 新潟県鳥類目録. 新潟県野生鳥獣生態研究会会報.
大畑孝二, 1991. アカモズとチゴモズの異種間つがいによる巣づくりと求愛給餌. Strix, 10: 280-281.

執筆者：高木昌興（大阪市立大学大学院）